

今川義元（榛葉竹庭）

鏤金 鞍上 威風 有り

暫く 征師を 駐む 涼蔭の 中

悔ゆらくは 千軍を 擁して 心陣を 欠くを

奇兵 一過 大營 空し

鏤金鞍上有威風 暫駐征師涼蔭中
悔擁千軍欠心陣 奇兵一過大營空

解説 今川氏親の三男、義元は初に駿河国、瀬古の善徳寺に居たが、長兄が早世するや次兄と家督を争い、天文五年これを倒して今川家を継いだ。検地並びに法度の制定など内政を整備すると共に、遠江・三河をも制して東海地方第一の勢力を誇るに至った。そして永禄三年五月、大軍を動員して上洛の途に就き、同月十九日桶狭間に陣したが、織田信長の奇襲をうけて無惨な最期を遂げた。

語釈 ※鏤金Ⅱ黄金をちりばめる。※鞍上Ⅱ鞍に打ち跨がる。
※暫駐Ⅱわずかの間、駐屯する。※征師Ⅱ遠征軍。※涼蔭Ⅱ涼しい木かげ。※千軍Ⅱ大軍。※心陣Ⅱ心の備え。※奇兵Ⅱ敵の不意を襲う兵隊。※大營Ⅱ大きな陣営。

通釈 黄金をちりばめた鞍に打ち跨がり、威風堂々として上洛の途に就いた今川義元は、暫時涼しい木陰に遠征軍を駐めた。ただ悔いが残るのは、大軍を率いて居たにも拘らず、心の備えを欠いたが為に、信長の三千の奇襲兵が過ぎ去るや、義元の陣営は忽ち一空に帰してしまったことである。